

インドと日本

岡倉天心の周辺

岡倉覚三（天心、1862～1913年）はJ.マクルウド（1858～1949年）とともにインドに1901年末から翌年にかけて初滞在する。セイロン経由でカルカッタ（現・コルカタ）に到着し、1902年1月6日にはベルールの僧院にヴィヴェカーナンダ師（1863～1902年）を訪ねる。彼は1893年のシカゴ・コロンブス万国博覧会の折に開催された世界宗教者議会で伝説的な成功を取っていた。この近代ヒンディズム改革者を京都に招き、第2回世界宗教者議会を開くのが、岡倉と仏教学者織田徳能の夢だった。師の弟子でアイルランド出身のシスター・ニヴェディタ（旧名E.M.ノーブル、1867～1911年）は、岡倉がインド滞在中に書き上げた『東洋の理想』（1903年）に序文を寄せ、『アジアの覚醒』（1939年）の原稿校閲も手がけたが、ベンガル分割令（1905年）を契機にスワデシ運動と呼ばれる英国製品ボイコットの国民運動にも関与してゆく。その周辺からは『インドの彫刻と絵画』（1908年）『インドの建築』（1908年）などの著者、E.B.ハヴェル（1861～1934年）や『中世シンハリ藝術』（1909年）を著したアナンダ・K.クーマラスワーム（あるいはクマラスワーム、1877～1947年）などが現れる。ハヴェルには岡倉の著作の題名を想起させる『インド美術の理想』（1911年）も知られる。これらの著作はスワデシ国民運動と連動して「本質的インド性」を謳い、従来のJ.ファーマガソン（1808～1886年）らによるグレコ・ロマンに模範を取るガンダーラ仏教重視の美意識を否定した。ここに、大英帝国統治下のインドで、国民統合の象徴としての美術史観が成立する。

岡倉は1903年、日本美術院に属する菱田春草（1874～1911年）、横山大観（1868～

1958年）をインドに派遣する。ガガネンドラナート・タゴール（1867～1938年）、アバニンドラナート・タゴール（1871～1951年）の兄弟、ナンダラル・ボース（1882～1966年）[それぞれベンガル音ではゴゴネンドロナト・タクル、オポニントロナト・タクル、ノンドラル・ボシュに近い]らとの交流が知られる。春草は従来の仏教図像を脱し、ビーナを奏でる「サラスヴァーティ」「弁財天」（1903年）、大観は「インド守護神」（1903年）、「流燈」（1911年）ほかの作品を残す。アバニンドラナートは朦朧体に刺激を受けて水彩施した画面を水に浸す「ウォッシュ」と呼ばれる手法を開発し、ナンダラルは昇竜の図に靈感を得る。1905年には、スレーンドラナートの家庭教師、勝田蕉琴（1879～1963年）が、カルカッタ官立美術学校で日本画教授となり、翌年には、チベット経由でインドに入った河口慧海（1886～1945年）とダーズリンを訪問。春草はアジャンター壁画を法隆寺壁画と比較する手記を残す。町田曲江（1879～1967年）、九里四郎（1886～1953年）も12年に訪問、また



アバニンドラナート・タゴール「パールト・マータ（インドの母）」1906年頃

桐谷洗鱗 (1877~1967年) が翌年に模写を試みる。岡倉は2回目のインド滞在 (1912年) で詩人P.D.バネルジー (1871~1935年) を知り、文通するが、13年に死去。同年アジア人最初のノーベル文学賞を受賞したラビンドラナート・タゴール (1861~1941年) は1916年初来日し下村観山、村上華岳らと交友 (1924、29年にも再来日)。大観の推挙によりインドに渡った荒井寛方 (1878~1945年) は、野生司香雪 (1885~1973年) と合流し、アジャンター壁画を模写 (1917~18年)。滞印作の一部は関東大震災で喪失するが、模写体験は、やがて法隆寺壁画模写に生かされる (十号壁「葉節浄土図」1951年)。

1902年、建築学者、伊東忠太 (1867~1954年) が単独のユーラシア大陸横断旅行の途上、陸路インドに入り、修行中の堀至徳 (1876~1903年) と合流、インド建築に開眼する。8ヵ月余の踏査記録として、3冊の野帳 (フィールド・ノート) と日記、大量の写真乾板が今日に伝わる。帰国後の西本願寺鎮西別院 (1911年設計) はブッダ・ガヤーの大精舎を彷彿とさせる大構想だが、同寺第二代門主・大谷光瑞 (1876~1948年) の資金難から中断。可睡斎護国塔 (1911年竣工) や築地本願寺 (1934年竣工) には、サーンチーの仏教遺蹟の

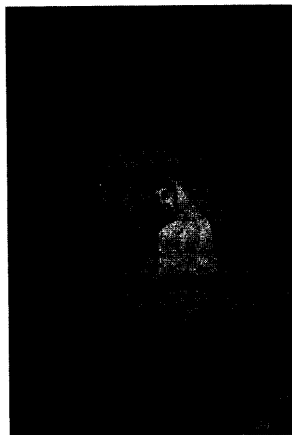
意匠が応用される。

1915年日本に密入国していたインドの革命家、R.B.ボース (1886~1945年) とヘーランバ・ラルー・グプターの2人は、国外追放命令を受け、玄洋社の頭山満の依頼を受けた相馬愛蔵 (1870~1954年) ・黒光 (1871~1955年) 夫妻により、新宿中村屋に匿われる。隠れ家は彫刻家の荻原守衛が発案し画家の中村彝が滞在していたアトリエだった。ボースは相馬夫妻の娘・俊子と結婚し中村屋サロンを軸に独立運動に挺身する。

インドを題材とした作品としては、今村紫紅 (1880~1916年) の「熱国の巻」 (1914年) などの東洋趣味、石崎光瑤 (1884~1947年) の装飾画ほか、戦後では、グジャラート州カッチの女性装飾絵画に着目した秋野不矩 (1908~2001年) の連作が特筆に値する。

(稲賀繁美)

参考文献: 「アジア近代絵画の夜明け」展 (図録) 国立国際美術館ほか、1985年。Tapati Guha-Thakurta, *The Making of a new "Indian Art," artists, aesthetics and nationalism in Bengal, c.1850-1920*, Cambridge University Press, 1992. Partha Mitter, *Art and Nationalism in Colonial India 1850-1922*, Cambridge University Press, 1994.



菱田春草「サラスヴァーティ」1903年



下村観山「弱法師」(部分) 1915年
本作に感動した滞日中のタゴールは、荒井寛方による模写を所望した。

監修者／編集委員紹介（五十音順）

- 監修 多木浩二（たき・こうじ） 評論家
藤枝晃雄（ふじえだ・てるお） 美術評論家
- 編集委員 尾崎信一郎（おさき・しんいちろう） [鳥取県立博物館]
塩谷純（しおや・じゅん） [東京文化財研究所]
高島直之（たかしま・なおゆき） [武蔵野美術大学]
林洋子（はやし・ようこ） [京都造形芸術大学]
古田亮（ふるた・りょう） [東京藝術大学大学美術館]
松本透（まつもと・とおる） [東京国立近代美術館]
山梨絵美子（やまなし・えみこ） [東京文化財研究所]

- 編集協力 福住治夫
- 協力 中村麗
末永史尚・富澤治子・荻野僚介・石川晶子・鳥村千代・松井真平
- 資料編デザイン 松岡千絵
- 装丁 東京書籍AD 金子裕

日本近現代美術史事典

2007年9月10日 第一刷発行

監修者——多木浩二・藤枝晃雄

発行者——河内義勝

発行所——東京書籍株式会社

114-8524東京都北区堀船2-17-1

03-5390-7531（営業）／03-5390-7500（編集）

<http://www.tokyo-shoseki.co.jp>

印刷・製本——東京書籍印刷株式会社

Copyright © 2007 by Teruo Fujieda, Koji Taki

All rights reserved.

Printed in Japan

ISBN978-4-487-73335-4 C1570 NDC702.16

乱丁・落丁の場合はお取替えいたします。